

OKEN

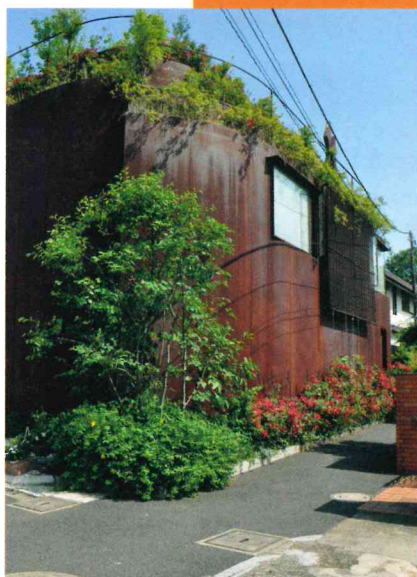
日本大学桜門建築会
<http://www.okenkai.jp/>

桜建会報

2014-December No.101



東京国際フォーラム／渡辺邦夫



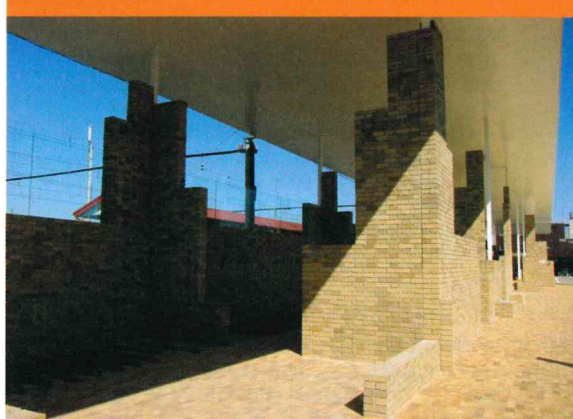
IRON HOUSE／梅沢良三



MintHouse／今川憲英



オージー技研九州支店／大野博史



上州富岡駅舎／小西泰孝

contents

特集1 ●メールアンケート 構造設計者の思想——2

渡辺邦夫 梅沢良三 今川憲英 小西泰孝 大野博史 斎藤公男

特集2 ●座談会 桜建会青年部、課題とこれからの活動——8

岩井光男 × 斎藤公男 × 北川健太 × 小野志門 × 東海林伸篤 × 関谷和則 × 佐藤慎也

追悼 黒沢隆先生 日高單也先生 神谷宏治先生——12

事務局だより——14

学部ニュース——15

構造設計者の思想

日大の卒業生たちは、さまざまな建築分野で活躍しているが、中でも構造の日大と言われるほどに、多くの構造設計者として活躍する卒業生の仕事が目ざれている。いわゆる建築家と呼ばれる意匠設計者に比べると、技術的な側面を担う構造設計者は、建築空間の背後にある骨格をデザインする者として、それを実現するための技術に対して、「思想」と呼ぶにふさわしいオリジナリティーをもっている。

今回の特集では、その構造設計者の思想の一端に触れるために、一線で活躍する卒業生にメールアンケートを試みた。彼らのことばの中から、建築空間を実現するための技術思想を垣間みることで、これからの建築と技術のあり方を改めて考えるきっかけにしてみたい。

8つの質問

- Q1. 構造設計を選んだきっかけになった建築物があれば、その理由とともに教えてください。
- Q2. ご自身が設計を行った中で、もっとも気に入っている建築物をあげ、その理由をお教えてください。
- Q3. 構造計算のために実際の建築物をモデル化する際、どのような点をもっとも考慮していますか。
- Q4. 東日本大震災などの災害を経て、構造設計に対する意識の変化が起きましたか。
- Q5. コンピュータの進化によって、構造設計に対する意識の変化が起きましたか。
- Q6. これまでも構造技術は進化を続けてきましたが、今後はどのように進化していくと考えますか。
- Q7. 「美しい構造体」とはどのようなものですか。
また、いままでに美しいと思った構造体があれば、その理由とともに教えてください。
- Q8. なぜ「構造の日大」と呼ばれるようになったのか、ご自身の経験の中で感じたことがあれば教えてください。

回答者



WATANABE Kunio
1939年東京都生まれ。63年日大理工学部建築学科卒業。64年横山建築構造設計事務所勤務、翌65年から木村俊彦構造設計事務所に勤務する。69年、構造設計集団<SDG>を設立。現在に至る。79年に斎藤記念賞、83年武蔵大学キャンパス再開発でBCS賞、90年幕張メッセでJSCA賞、BCS賞(91年)、97年東京国際フォーラムでJSCA特別賞、2004年横浜港国際旅客ターミナルでBCS賞を受賞。著書も多数。



UMEZAWA Ryouzo
1944年群馬県生まれ。68年日大理工学部建築学科卒業。木村俊彦構造設計事務所、丹下健三都市建築設計研究所を経て、84年梅沢建築構造研究所設立。2000年鳥取県立鳥取フラワーパークで松井源吾賞、05年彩の国くまがやドームで日本構造技術者協会作品賞、09年三重県立熊野古道センターで日本建築学会作品選奨賞、第13回公共建築賞(文化施設部門)(12年)、11年IRON HOUSEで日本建築学会賞(作品)受賞。



IMAGAWA Norihide
1947年広島県生まれ。69年日大理工学部建築学科卒業、70年構造設計集団<SDG>入社。78年TIS&PARTNERSを設立。2003~05年まで日本建築構造技術者協会(JSCA)副会長。00年より東京電機大学建築学科教授。99年日本建築学会賞(業績)、2000年IASS TSUBOI賞、10年「横浜赤レンガ倉庫」でユネスコ文化遺産アジア太平洋遺産賞受賞。その他多数の建築学会賞受賞作品の構造設計を担当。



KONISHI Yasutaka
1970年千葉県生まれ。95年東北工業大学工学部建築学科卒業、97年日大大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。同年佐々木睦朗構造計画研究所入社。2002年小西泰孝建築構造設計設立。08年「神奈川工科大学 KIAT 工房」で第3回日本構造デザイン賞、13年「熊本駅西口駅前広場」で第24回JSCA賞奨励賞を受賞。



OHNO Hirofumi
1974年大分県生まれ。97年日大理工学部建築学科卒業、98年ユーゴスラビア ENERGOPROJEKT 海外研修、2000年日大大学院博士前期課程修了。2000年より池田昌弘建築研究所勤務、05年オーノ JAPAN 設立。現在、京都造形大学、日本大学、日本女子大学非常勤講師。11年第6回日本構造デザイン賞受賞。14年「構造デザインマップ東京」(総合資格学院、共著)を発行。



SAITOH Masao プロフィールはP8参照。

Q1 構造設計を選んだきっかけになった建築物があれば、その理由とともに教えてください。

渡辺邦夫 ●大学2年生の頃、日本に初めて(?)イタリアのピエール・ネルヴィとメキシコのフェリックス・キャンデラの作品写真集が紹介された。これを見て構造設計者がつくる建築の大胆さ、美しさ、緻密さに深く感動した。多くの市民の心を揺さぶる建築とは、構造からのアプローチが最短距離であることを発見した。ネルヴィのローマオリンピックの小体育館、キャンデラのHPシェルの教会建築、これらの写真集を見た時の衝撃は、いまでも忘れることができないほど鮮烈だった。

梅沢良三 ●群馬県出身の私は1964年4月に入学のため上京した。ちょうどその年の10月に開催された東京オリンピックの施設はすでに完成し、毎日のように見学して歩いた。1年目の教養課程は日大文理学部で履修したが、6月16日、物理の講義中に新潟地震が発生し、東京でも授業が一時中断するほどの揺れに襲われ、関東大震災以来の大地震に日本中が大騒ぎとなった。このふたつの出来事に加え、私が就職する68年は70年の大阪万博の建設が

ピークを迎えていた時期で、お祭り広場の巨大な屋根や、69年7月にアポロ11号が月面からもち帰った月の石を展示する世界初のエアドームを採用したアメリカ館など、新技術の粋を競うかのような建設を直接目にする事ができた。私が構造設計を選んだきっかけは、この時代背景にあり、とりわけ建築家丹下健三と構造家坪井善勝のパートナーシップによる代々木競技場や東京カテドラルがマスコミでも取り上げられ、構造家を目指す夢を抱くことができた。

今川憲英 ●東京オリンピック代々木室内競技場の建設現場。まず目に留まったのは建築空間で代々木ほどダイナミックな空間に出会ったことがなかったこと。その吊り材のジョイントが自分の専門の鋳物であったこと。そして、H型鋼を凹状に曲げた半円状の大屋根であったこと。これらのことから坪井善勝教授が教えている東大、早大、そして日大を探し、日大に入学した。

小西泰孝 ●父が構造設計をしていたの

で、私にとってもっとも身近な仕事でした。建築物では、「せんだいメディアテーク」のコンペがちょうど学部4年の時に行われ、当時、仙台にいた私はその構造に衝撃を受けました。大学院で日大に進み、先輩の多田脩二さんを頼って、「せんだいメディアテーク」の構造を担当していた佐々木睦朗さんの事務所でアルバイトをさせていただき、そのまま就職し、構造設計の道に本格的に進みました。

大野博史 ●ロベルトマイヤールのサルギナトバル橋。ある雑誌に掲載されていた1枚の写真を見て、構造体そのものである橋を「美しい」と感じました。技術は美的な判断を必要としないものと考えていた学生時代の私に、建築と構造の関係を再考させてくれるきっかけになった作品です。構造設計とはあるデザインを実現させるための計算作業でしかないと思っている学生がいたら、ぜひ、見ていただきたい。数式にも美しい式といわれるものがありますので、美しさというのは視覚的なものだけではないのだろうと思っています。

Q2 ご自身が設計を行った中で、もっとも気に入っている建築物をあげ、その理由をお教えてください。

渡辺 ●自分が設計に参加した建築物すべてが、さまざまな想い出があり自分では全部気に入っているが、強いてあげるなら以下の3点。①東京国際フォーラム。アメリカの建築家ラファエロ・ヴィニオリさんと四つに組んでつくりあげた、建築全体の構成法、システムと部品のディテールまで一貫してデザインできた例。②幕張メッセ。日本を代表する建築家槇文彦さんと組み、I期工事は驚異的な短期間で巨大な展示場を密度高く完成したこと、II期工事の北ホールは華麗な大屋根を完成させたことなど。③横浜港国際旅客ターミナル。イギリスの建築家アレハンドロ・ポロさんとの協働作品。コンピュータの威力をどこまで実践できるかに挑戦した。

梅沢 ●Irony Space と Iron House。このふたつの建築は双子のような建築であり、一方の建築家はアーキテクト5で、

用途は私の仕事場、他方の建築家は本学出身の椎名英三氏で、用途は自宅である。ともに私が施主であり、構造設計者であるから、自分が気に入るような設計は当然ともいえるが、やはりこのふたつの建築は、自分にとって特別な建築のように思う。

その理由はこの建築が、私が構想した住宅シェルター論の実践としての建築であるからだ。住宅シェルター論をこいつまんで述べれば、住宅はシェルターのように外殻のみがデザインされ、内部は仮想的にしつらえ、家族構成の変遷とともに変幻自在な空間の自由度をもち、外殻は200年程度の長きにわたり、メンテナンスを要せず使続けられる建築とすべきだ。

このふたつの建築のシェルターはデッキプレートに厚さ4.5mmの耐候性鋼板を両側からサンドイッチした、厚さ10cmのパネルを防水溶接によって

一体化し、錆仕上げとしているため、ペンキの塗り替えや防水工事など、通常必要な外装のメンテナンスを要しない。

今川 ●石造では鹿児島県串木野市のコミュニティセンター集会所、レンガ造では横浜赤レンガ倉庫の耐震改修リノベーション。木造では、集成材系は今井記念ドーム、彫刻の森美術館のネットの森・組積ドーム、尾道市のテアトルシェルネの木造格子シェルネ、和歌山県新宮健康増進センター、製材系では小布施市の伝統貫構造を屋根に用いた桜井甘精堂、伝統貫構造と格子の南三陸町あさひ幼稚園。鋼構造では、シザーズ構法を取り入れた青森県「青い森アリーナ」、北九州スペースワールドスペースシャトル「ディスカバリーモニュメント」、制震パネルおよびブレースを取り入れた「東京銀座資生堂」、ハ

イブリッドテンション構造を取り入れたタキイ種苗京都。RC構造では厚さ35cmの床と壁と14層の基礎免震を取り入れた集合住宅本郷パークハウス、瑠璃光院白蓮華堂。無仮設RCでは、MintHouse、その他EXPO83大田リサイクリングパビリオン、アパートヘイ

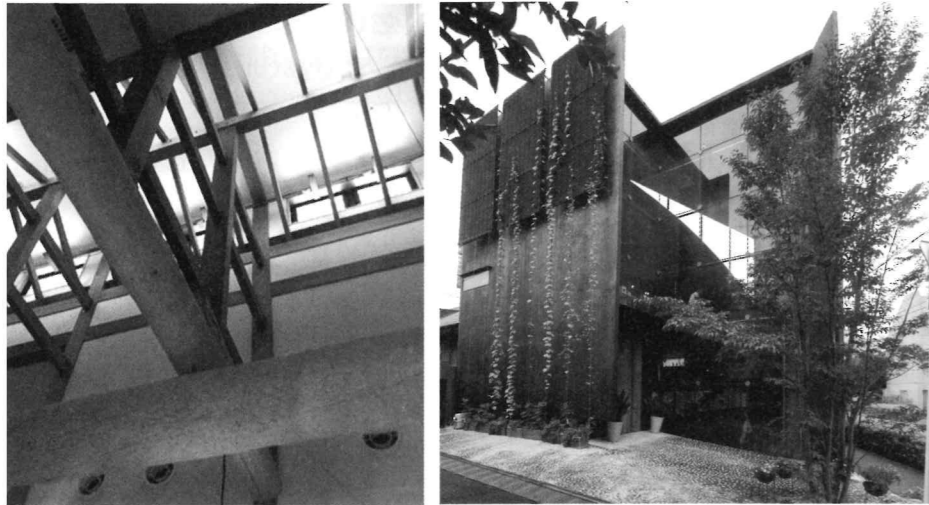
ト「否」移動美術館、テンションリングStrを用いたシェイドRoofアルプライトカレッジフィラデルフィア、彫刻の森サスペンションネット遊具「ネットの森」、ローマMACRO美術館のテンションネットAir Pocket。

小西●構造設計を担当した作品はそれぞれ思い入れがあり、ひとつを選ぶのは難しいですが、最近の作品としては、「上州富岡駅舎」があります。世界遺産や国宝に決まった富岡製糸場の最寄り駅で、コンペでは、富岡製糸場で採用された木骨レンガ積造の“気概を継承”する構造提案が求められました。

300社以上の応募の中から最優秀案として選んでいただいて実現したプロジェクトですが、構造が主張し過ぎず、建築と構造の融合をよいかたちで図ることができたのではないかと思います。

大野●ひとつに絞ることができません。

左／「桜井甘精堂」今川憲英 右／「Irony Space」梅沢良三



Q3 構造計算のために実際の建築物をモデル化する際、どのような点をもっとも考慮していますか。

渡辺●精緻な解析ソフトが開発されて、僕たちの日常活動に大いに貢献している。僕は「一貫計算ソフト」は使わない。架構のシステムを決めたらそれに各種の外力を与えてその架構を構成する部材の変形と応力を知るためにコンピュータを使う。その応力の意味と量からどんな断面が最適かを改めて計算するのである。少しでも欠点があれば、最初の架構のシステムまでフィードバックする。それを何回も繰り返すことが「設計」なのだ。この時、全部材と全節点を入力データに入れ込むと、そのアウトプットデータは膨大なものになり、それを読み込むのはほとんどの場合不可能なので、簡易モデルを考案して、設計しようとする構造物の全体的な挙動を把握することが重要。

梅沢●実際の建物の計画案の中に潜む「構造」を図面から読み取る。例えば階段室やEVコアは、コアシャフトとして、全階連続して設けられるから、建物の水平垂直荷重を支える有効な要

素となる。高層建築などは、この動線コアにトイレなど含めたサービスコアを平面の中心に集中して設け、その周りに事務空間などを配置する場合が多い。モデル化でもっとも重視することは、計画案すなわち建築と構造の融合を図ることで、構造を建築のノイズとしないことである。

今川●建築の構造は素材の3素形[塊材、面材、線材]で構成されることになる。したがって3素形がインプットしやすいモデルによるとともに、ジョイントが建築の寿命をもっとも左右するので、素材とジョイントを長寿命にするモデル化を行っている。

小西●どんなに複雑な構造でも、最初はできるだけ単純化したモデルで全体を捉えるように心がけています。具体的には、曲げ系では単純梁もしくは片持梁、軸圧縮力系であれば単材のオイラー座屈系でシンプルに考えます。これらの計算は、構造力学の授業の初期

段階で習うものばかりで、その時、コンピュータは使わず、すべて手計算で行います。

大野●設計段階によって異なる解像度のモデル化を行うことを意識しています。モデル化の段階にはいくつかあります。打ち合わせの段階では簡単な計算で判断を早く求められるようなモデル化が必要です。そのため関数電卓で可能なモデル化を行います。乱暴に言えば多少曲がっているものでも直線の材としてモデル化し計算することもあり、その後、手計算で得られた結果を裏づけるためのモデル化として、コンピュータを用いて詳細なモデル化を行う段階があります。ここでは現実により近いモデル化が必要で、現実とモデルの違いを一定の安全率でカバーできるかどうかを意識しています。

これまでに経験のないものをモデル化する際は、数種の異なるモデルを用いることが重要です。

Q4 東日本大震災などの災害を経て、構造設計に対する意識の変化が起きましたか。

渡辺●「耐震設計」の枠組みを変えなければならないことを痛感した。設計しようとする敷地の局地的問題をフォローしなければ設計は完成しないことを学んだ。耐震設計は、「地震」に対していかに安全な設計をするかの問題と、「火災・津波・土石流・液状化・崖崩れ・河川の氾濫・地滑り・不動沈下」に対してもその安全性を保障しなければならない。さらに、構造体だけでなく仕上材(天井・壁・サッシ・建具)、設備配管やカーテンウォールの細部まで、「耐震設計」をしなければならないことも学んだ。

梅沢●東日本大震災以降、今年10月の御嶽山の噴火や、2月に関東地方を襲った過去の観測記録を大幅に上回る豪雪なども含め、近年、法律が予測する、かつて経験した規模をはるかに超える

自然現象が頻発している。これらの異常現象の理由は諸説ある。地球温暖化や、地球規模の地殻変動の活動期などと説明されているが、法整備は後手に回っている。このような地球変動期は、経験と予測に基づき、不十分な法を補うなど、構造設計に対する意識を大いに変えなければならないと考えている。

今川●すべての被災県で各々7~8つ以上のプロジェクトを実現しているが、幸いにも被害がなかった。今まで通り素材とジョイントの性能の質を確保しながら、建築の上棟までの監理を行う。

小西●現行法では、大地震時は、構造体の損傷が許容されており、継続的に使用できなくともよいとされています。一方、その際に避難生活ができる施設が十分なのかということ、そうではあり

ません。大地震後、いつもこの点に矛盾を感じます。大地震後の構造のあり方を、建築用途に応じて考えるようになりました。

大野●「安全」であるということがどのように意識されているのか、技術者と一般の方の違いを強く感じるようになりました。構造設計という行為が建築の専門技術者の中で閉じられていては、理解が得られないと思うようになりました。「安心」で「安全」な建築と言いますが、どのように「安全」を確保し、どのような想定がなされているのかを説明してはじめて「安心」を得られると感じています。構造設計の行為の中で、そういった説明の場を設けることが重要だと思うようになりました。

Q5 コンピュータの進化によって、構造設計に対する意識の変化が起きましたか。

渡辺●大幅に変わったし、現在も変化しつつあると思う。その変化を大別すれば以下の3点である。①構造設計における作図/曲線や曲面の作図、複数案の比較検討が容易になり、案の作成に貢献する部材の複雑な接合部の立体的な作図が短時間で可能になった。②構造計算における極端な時間短縮と解析精度の向上。③プレゼンテーションの立体的、色彩的表現。僕たちは自分だけで設計しているわけではなく、クライアントや建築家、設備設計者や工務会社、鉄骨会社やコンクリート会社など多くの方々との協働作業である。自分が考えた案を皆さんに説明しなければならないが、コンピュータの進化によってプレゼンの表現手法は大幅にわかりやすくなった。

梅沢●1970年代以前は、応力が得られるかどうか構造システム創造の前提であったので、構造の合理性が追求された。しかし、どのようなシステムでも検証が可能となった現在は、この

束縛から解放されたデザインが国際コンペなどで求められるようになった。私はこのような建築を「近未来建築」と呼んでいる。例えば北京オリンピックの鳥の巣のように、今までにない形態表現に挑戦し、視覚的インパクトによってコンペに選ばれる傾向がある。力学的合理性の追求こそ構造設計の本質であるという意識は正しいが、それだけでは十分でないと感じている。

今川●常に最先端のコンピュータ技術を取り入れながら、念のため、手計算の確認システムとのコンビネーションを推進している。

小西●私が構造設計を始めた時点では、すでにコンピュータを用いるのが、一般的になっていました。しかし、始めた当初と今ではパソコンの演算速度が雲泥の差で、その結果、構造設計の業務のひとつである構造計算にかかる時間が大幅に短縮されました。その短縮された時間を次にどのように有効に

使うかが、構造設計者のキャラクターの違いに表れているように思います。

大野●構造設計を始めた時にはすでにコンピュータが導入されており、それによる変化を強く意識することはありませんでした。ただ、設計当初は難しかった面的モデルも、現在では容易にできるようになりました。今後も実際に近い形状でモデル化が可能になってくるため、より複雑なものをそのままにモデル化する、複雑さを許容する設計方法が現れてくるでしょう。また、コンピュータの進化により解析スピードが増加した影響で、検討→結果→評価→再検討という作業ルーチンを、今まで以上に多くこなすようになりました。これらふたつの現象で難しいのは、結果に対する判断基準を確立していくことです。定量的な把握はコンピュータの得意とするところですが、定性的な判断は人間に委ねられているということ念頭において、設計を行っています。

Q6 これまでも構造技術は進化を続けてきましたが、今後はどのように進化していくと考えますか。

渡辺●もちろん今後も構造技術は大きく進化を遂げると思う。ふたつのプロセスがあり、ひとつはハイブリッドの進化、そしてもうひとつは建築構造工学以外の工学分野との横断的交流で産まれる進化だ。橋梁工学、造船工学、航空工学、車輛工学などだけでなく、情報工学、地球工学、遺伝工学など生物工学を含む広範な工学の研究成果が、僕たちの構造技術と混ざり合い、無限の広がりや深化をもつようになる。

梅沢●20世紀は新しい技術の世紀であったと思う。新しい構造技術は1970年の大阪万博で一気に花開いた感がある。その後の構造技術の進化は免震、制振といった地震のエネルギーの解明と制御技術が中心となったが、コンピュータの進化によるものと考えられる。歴史的に進化してきた構造技術とは、構造材料、構造システム、施工技

術、解析技術などの進化と思われるが、これらは大阪万博以来、解析技術を除いて、目に見える成果はない。顕著な進化があるとすれば、ソフト的な面となるのではと考えている。建築家や構造家の斬新な発想が求められる時代になっているのでは。

今川●これまでは完成した素材を使用した構造設計が主であったが、今後は空間にあった構造の新素材開発を含めた進化が展開すると思われる。

小西●解析技術、施工技術の向上で、建築家が思い描く形態を構造的に成立させることが、容易になっています。今後はこうして進化する構造に関する技術を、構造以外のさまざまな技術や設計とどうマッチングさせるかが重要になるように思います。例えば、環境や設備に関する技術の進化も構造

同様に目覚ましいものがあり、ひとつの建築に求められる機能も多様化しています。そういう中で構造設計者は、構造以外の分野に対する理解をより深め、建築全体の中での構造バランスをコントロールしていく必要があるのではないかと思います。

大野●解析技術と施工技術の進化する速さは異なります。コンピュータ処理と結びつきの強い解析技術の進化は速く、施工技術はその技術の浸透を含めて考えると、とても遅いものです。すでにそうなりつつありますが、その進化スピードの違いから、まったく異なる施工方法が現れてくると思います。例えば模型製作技術における3Dスキャン/プリンターの登場を考えれば想像できます。これまでにない施工技術・方法が考えられ、またそれを補うような解析技術も進化すると思います。

Q7 「美しい構造体」とはどのようなものですか。また、いままでで美しいと思った構造体があれば、その理由とともに教えてください。

渡辺●僕は「構造体は常に美しくなければならぬ」と考えています。また、世界中に美しい構造体は無数にあります。むしろ「醜い構造体」を意図的に設計している、例えばアメリカのフランク・ゲーリーとかイギリスのザハ・ハディドに協力している構造設計者がいることを残念に思います。

梅沢●例えば人間の骨格のようなものと思うが、骨格は重力の作用の下で肉体を支える機能に対し進化を遂げてきた。しかし建築の構造体は、大空間や超高層を支えると同時に、建築の表現と大きく関わる点に違いがある。建築の構造体は、人的な作為が入る余地があり、時代背景などが無視できない。たとえばハイテクスタイルが流行した時代があったが、今は環境と結びついていないと評価されないなど。建築のスタイルとイズムは時代とともに変化

するので、その構造の美は必ずしも普遍的とは言えないのではと考えているが、「美は合理的の近傍にあり」と言われる。すなわち、わずかに離れたところにあるのかも。

今川●広義には構造体自身が個性をもっていて、自然界や社会にフィットしている。狭義には建物単体自身の美しさがありながらも構造のシステムが空間を妨げない、それが「美しい構造体」だと考える。

小西●建築ではありませんが、短波通信用の「八木アンテナ(八木・宇田アンテナ)」が私にとって美しい構造体です。八木アンテナは、魚の骨のようにエレメントが連なり、ビルの屋上やタワーの頂部に載っている通信用アンテナです(TV用の小さなものではなく、短波通信用の1エレメントが5m以上ある

大きなもの)。地震や風などの外力に耐える構造合理性を備えた繊細な部材プロポーションで、かつその形態(配列)は、最小限の電力で最大の通信距離を達成する究極の合理性を保持しています。このように構造合理性に圧倒的な機能性が付加された構造体に美しさを感じます。

大野●視覚的に美しいと思うものは、繊細であったり、かたちの均整がとれていたりするものですが、ものの大きさによっても変わってくるためプロポーションがよいものと考えています。一方で視覚的ではないものにも、美しさを感じることがあります。一定のリズムで柱があり「システム」として明快さをもった構造体や、力学を素直に表現しているもの、簡素な(深い)構造体にも美しいと感じることがあります。

Q8 なぜ「構造の日大」と呼ばれるようになったのか、ご自身の経験の中で感じたことがあれば教えてください。

渡辺●「構造の日大」というキャッチフレーズは日大関係者から聞いたことはありますが、世評としてはそんなことは聞いたことがない。他の大学からも優れた構造設計者は輩出しているし、日大出身の優れた建築家、建築デザイナーもたくさんいます。いつごろ、それが言い出したのでしょうか？

梅沢●私が入学した1968年(東京オリンピックの年)、すなわちほぼ半世紀以前に、すでにそのように聞いていた。今もそうだとすれば、優秀な先人たちの努力によって、伝統が引き継がれてきた結果と考えられる。そもそも日本の建築構造学の創始者、佐野利器先生が40歳の時(20年)、日本大学が創立した高等工学校(理工学部の前身)の校長に就任し、建築学科の創始者となった時点ですでに「構造の日大」とし

てのスタートであったのでは。創立以来100年にわたり引き継がれた伝統を、いかに守っていくか問われている。

今川●理工学部建築学科の初期は東大の構造系の教授がリードしてスタートしている。したがって必然的に意匠的な質の低下は少ない。また学生が東大の5~10倍であるため、日大の上位5~10%は東大とほぼ生徒数は同じである。したがって専門的なものとしては同等であるが、俯瞰的な全体を見通す能力としては及ばないところがある。この専門的なところが秀でて、社会に伝わっているのが現状である。

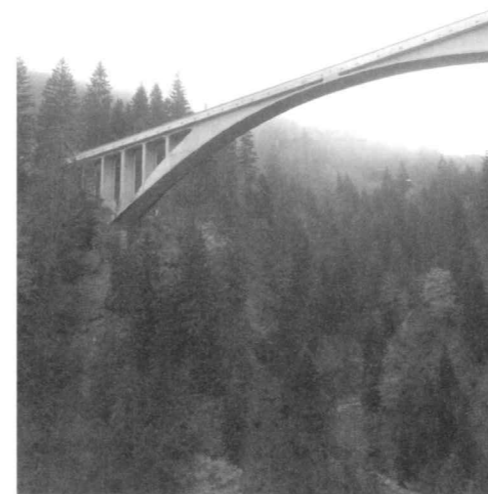
小西●学生時代に何かのきっかけで構造のおもしろさに触れた人が、今、構造の分野で仕事をしているのではないのでしょうか。そういう意味では、日大

の構造カリキュラムは充実していますし、長い歴史の中で構造設計あるいは構造研究の分野で多くの先輩方が活躍されているので、構造に進むことが非常に身近なことと感じられる大学なのではないかと思います。

大野●昔から「構造の日大」ということばを耳にしましたが、それを強く意識することはありません。私の場合は結果的に(ある意味偶然)構造設計の道に進みました。「構造の日大」といわれる所以があれば教えていただきたいです。

斎藤公男●私が入学したのは1957年。その頃から「構造の日大」のことばをよく耳にしてきました。かつて構造界をリードしていた佐野利器、小野薫に次いで斎藤謙次、加藤渉をはじめ、すぐれた教授陣によって構造教育と研究業績が高く評価されていたことがその背景にあったと思われます。確かに構造技術の分野で活躍する卒業生も数多く輩出されました。しかし「構造設計」に対しては別の視点が必要でしょう。「これからはデザインの日大だな」といわれた近江榮先生のことばも思い出されます。

研究と教育を軸とした大学で、私が「構造デザイン」や「空間構造」に対する興味を抱き、それを実践できたのは構道家・坪井善勝と建築家・小林美夫のおかげでした。そして坪井先生と親交の厚かった田治見宏と木村俊彦。この3人の存在が「構造設計の日大」ともいえるひとつの流れのルーツであり、そこから80~90年代の日本を牽引した活力ある日大卒の構道家が生みだされたのではないかと。今、40代の若き構道家の活躍が目されるのも「構造の日大」の伝統なのかもしれません。今回の建築学会における「構造デザイン」のテーマも日大の学生らの積極的な活動によって支えられています。例えば20回を数える「構造デザインフォーラム」、国際的イベントとなった「学生サマーセミナー(SSS)」や「アーキニアリング・デザイン展」。建築(家)と構造(家)との融合を理念とするこれらの活動を通じて、次世代の「構造の日大」の新しい舞台が広がっていくことが期待されてなりません。(特別寄稿)



左/サルギナトベル橋
下/「幕張メッセ展示場と北ホール」 渡辺邦夫



桜建会青年部、課題とこれからの活動

若手たちを中心とする青年部が発足し、せっくなので重鎮の方たちと対話をしてもらおうと考えたのが、この座談会のはじまり。遠慮のない若手たちに、柔軟な重鎮たちが対等に向かい合う様子は、まさに90年以上の歴史をもつ同窓会ならではの光景だろう。青年部と言っても、集まる若手たちはやはり個性派ばかりで、立場も価値観もさまざま。そんな彼らがつくり出す新しいプラットフォームはどのようなものか、そんな楽しみな今後を感じることができる座談会となった。

桜建会存続への危機感

佐藤 ●前号では桜建会の中の組織として立ち上げた青年部の記事を掲載しました。今回はこの青年部をつくった意図と役割について語り合う座談会を企画しました。来ていただいたのは会長の岩井光男さん、名誉顧問の齋藤公男先生、それに青年部のメンバーである北川健太さん、小野志門さん、東海林伸篤さん、関谷和則さんの4人です。まず岩井さんから桜建会の現状と問題点をお話してください。

岩井 ●われわれを取り巻く環境は激変しています。今年に入って65歳以上が4分の1を超えました。その社会のカタチがもっとも顕著に表れているのが桜建会なんです。

われわれの世代は生まれてこの方、同じような価値観の中で育ってきていて、その世代がこの世界をつくり上げてきた。今、青年部にいる30、40代の人たちは、非常に多様な価値観をもつ世代で、そこで大きなギャップがでてきた。単純な価値観をもった世代と多様な価値観をもつ世代とが、社会の中でどういうカタチで組織として動いていったらいいか。桜建会は2年前に活性化懇談会をつくり、齋藤先生を始め、なんらかの有志の人たちに集ってもらい、この状況を打破するためにはどうしたらいいかと話をしています。

喫緊の課題は、急激な会員の減少。

会社をリタイアした人たちが離れてしまし、若い人たちも、年配者のグループに入りにくいという状況がでてきた。桜建会の社会的な役割や貢献などを考えると、今までみたいに建築関係だけのネットワークだけでなく、もっと大きく広がった枠組みの中でとらえないと、社会に適応した組織にはならないと思います。

佐藤 ●齋藤先生は、今の桜建会をどうみていますか。

齋藤 ●僕が日大にもどった時は、学部の次長をしていた齋藤謙次先生が50代そこそこくらいの1960年代です。その頃から桜建会の活動が芽生えてきたんです。あの時代は大学の先生とOBのグループとがひとつになっていて、大学と社会がものすごく近かった。だから桜建会が身近でした。それからしばらく経つと体質が硬直化したように感じて、距離を置く時期もありましたが、岩井さんが会長になったことで、少し可能性を感じられるようになりました。岩井さんが言われる、会員を増やしたいということは当然のこと。しかし私自身は、質的な問題が気になります。数は大事ですけど、OBの人たちが、もっとお互いに力を合わせることに重要じゃないかと。

私が建築学会の会長をやった時は、若い人たちと一緒に仕事をやることで、なにかが動くという経験をしました。例えばアーキニアリング・デザイン展

では、学生と直にコミュニケーションがとれますから、お互いの建築に対する思いが見えるんです。そういうカタチが大事。活性化のために「NUアート倶楽部」を始めましたが、これはわれわれ年配者の提案です。本来は若い世代からシルバー世代に対して、「やりたいこと」を積極的に言ってもらいたいですね。

若手が考える同窓会の役割

佐藤 ●次に青年部の皆さんの桜建会に対する思いややりたいことを話してください。代表の北川さんからどうぞ。

北川 ●もともと、桜建会をどうにかしようという考えは露ほどもありませんでした。(笑) 桜建会に顔をだしていたのは、「利用したい」というのが一番の目的でした。会報前号でも書きましたが、僕たちは経験不足で、知識も足りないところもあるので、そういうところをバックアップしてもらったり、他の卒業生で、構造や歴史、都市計画などの能力のある人間が集まって、ひとつのものができたら、単独でやるより大きな力になると思っています。桜建会には、ネットワークをうまく使えるような状態をつくること。具体的なカタチができれば、他の人もイメージしやすいと思うので、なんとか実行したいと思っています。

佐藤 ●固いね。(笑) 同世代の小野さん、



KITAGAWA Kenta
1983年東京生まれ。2008年理工学部建築学科卒業、設計事務所を経て、12年に建築設計ユニット「セカイ」結成。桜建会青年部代表。

卒業後、仕事の関連で岡田章先生や宮里直也先生の研究室に行き、その帰りに桜建会事務局が目に入り、訪ねたのがきっかけ。そこで桜建会のサロンを紹介してもらい、「なんだ君は」という話になって(笑)、通うようになりました。



ONO Shimon
1983年東京生まれ。2010年大学院理工学研究科博士前期課程修了、同年久米設計入社。現在、建築設計部主査。「セカイ」のメンバー。

学年は北川のひとつ上だけど、歳は一歳です。佐藤光彦研究室の初代卒業生です。一級建築士をとったら桜建会に関わりたと思っていて、ちょうどとれた時に、青年部の話があって、ぜひ!というカタチで参加しました。

どうぞ。
小野 ●先ほど岩井さんが価値観が変わってきているとおっしゃいましたが、今の学生は、大学がどういうコンセプトで存在しているのか、あまりわかってないと思っています。大学は就職するためのところになっている。日大はもっとアカデミックな意味で、建築を学べる大学、自分たちが先生たちと一緒に頑張っていける大学になってほしい。そのため、卒業したら終わりじゃなくて、価値を高めるには卒業生同士が交流しながら在校生にアピールして、アカデミックな意味で進歩があるようにしていきたい。大学が生き残るために、桜建会は重要ななと思っています。

佐藤 ●世田谷区役所に勤めている東海林さんはいかがですか。

東海林 ●私は学生時代から、公共空間や地域コミュニティに関心がありましたが、仕事として具体的な関わり方がわからないまま社会に出ました。紆余曲折の末、今の行政の仕事にたどり着きましたが、桜建会にもっと早く関われば、さまざまな先輩に相談する機会が得られやすく、自分の道も定めやすかったのではと思います。人生の先輩とつながれる場として、同窓会の役割は大きいと思います。

佐藤 ●関谷さんには、今年から理工建築の非常勤講師に来ていただいていますか。

関谷 ●私は非常勤の先生との話が刺激

的で楽しかった記憶があるので、意識的に学生とコミュニケーションをとるようにしています。学生に「将来どんな仕事をやりたいの?」と聞くと、「わからない」という子がたくさんいるんですね。大学の先生と違う立場の社会人が学生に関わることは、けっこう大事じゃないかと思います。私は組織に属しているので相談できる人は周りにたくさんいて、自分のスキルを磨ける環境にあります。しかし最近、組織の中の閉じているネットワークだけでは視野が狭くダメだなとも思っています。日大のメリットは、いろいろな分野で活躍する卒業生がたくさんいること。桜建会がうまく大学と社会をつなげられれば、参加する人が増えるのではないかと。

佐藤 ●各人考えていることはバラバラですね。これは、岩井さんが言う多様なものかもしれないし、社会との距離に対する考え方の違いとも思いますが、なんでこのメンバーになったんですか。
北川 ●僕が活性化懇談会にひとりで行き始め、その会に参加されている会社勤めの方が、自分の会社の若手とか、付き合いのある若い人に声をかけて集まりました。

岩井 ●皆さんの話を聞いていて、僕もそう思うこともあるんですよ。日大も昔は早稲田の次という社会的な認識もあったけれども、でも今はほとんど埋没している。僕の会社でも、新入社員

に日大の卒業生が時たま来てまして、そういう人たちには活躍してほしいと思うんです。内心ですよ。(笑) 立場上、声をかけるわけにはいかないけどね。

活性化のキーマンは教員

佐藤 ●先ほど、齋藤先生が社会と大学は近かったと言われましたが、今は違いますか。

齋藤 ●それは大学の教員の問題がひとつあると思うんですよ。学会もすごく近かった。つまり学内だけじゃなくて、外に対しても常に意識があって、桜建会の人と教員がいろいろな問題に対して一緒に考えてきた。必然的に学生も一緒に活動していた。今日は、教員がいないみたいだから言うけど(大笑)、そういう感じが今は抜け落ちていると僕は思う。桜建会が活性化するには、教員が活性化しなければ絶対にダメ。最近の活動をみると、総会に行っても教員はあまりいないし、新年会もない。そこを改善しないと、青年部をやるといっても少し違和感が残る。いきなりシルバーと若手では不自然です。しかしまあ、先生が忙しいのはわかりますけどね。せめて気持ちの上でつながっていく、そんな役割が必要なんじゃないかと。

岩井 ●昔は、大学の先生が公共建築などの実施設計をやっていました。学生はその作品を見て、この先生のところ



IWAI Mitsuo
1945年東京都生まれ。70年理工学部建築学科卒業、同年三菱地所入社。2005年三菱地所設計取締役副社長就任。丸の内ビルディングや日本工業倶楽部会館の保存と活用などで、BCS賞や建築学会賞を受賞。11年より桜門建築会会長。



SAITOH Masao
1938年群馬県生まれ。61年理工学部建築学科卒業。同大名誉教授。工学博士。2007年～09年日本建築学会会長。86年日本建築学会賞(実績)、93年松井源吾賞、97年Tsuboi Award、06年Aluprogetto賞、09年トロハ賞を受賞。現在、桜門建築会名誉顧問。



SHOJI Nobuatsu
1971年埼玉県生まれ。96年大学院理工学研究科博士前期課程修了。民間企業、公共建築協会を経て、現在、世田谷区職員。コミュニティ・ビジネス・ネットワーク事務局長。

世田谷区にアトリエをもつOBの小玉さんに声をかけていただきました。文化庁の新旧立劇場準備室で責任者を務めた建築家でもあり、日大建築の先輩方の層の厚さを感じます。



SEKIYA Kazunori
1971年群馬県生まれ。96年理工学部大学院海洋建築工学専攻修了、同年竹中工務店入社。現在、東京本店設計部 設計5グループ課長。

こちらに顔を出すようになったのは、会社の先輩の神田孜さんに「来いよ」と言われたのがきっかけです。OBは、学校の授業では与えられないような情報を提供できるし、少しでも学生のみなさんの力になればと思っています。

で学びたいと思った。それで、実際の設計を手伝ったりして、学内にいながら社会のことも経験できた。コンペをやるにしても先生だけでなく、横のつながりを広げていけば有利になるので、そういうことも桜建会でできたらいいですね。

佐藤●教員部会をつくらないといけませんね。

斎藤●慎也さん、教員としてなにかコメントしてくださいよ。(笑)

佐藤●僕は教員代表としてではなく、どちらかという日大の一卒業生として、桜建会に関わるようにしています。もちろん、年齢的に学生と比較的近いので、学生に対して桜建会のことをアピールする場面を増やすようなこともやっています。

小野●慎也さんは桜建会をどうしていききたいですか。

佐藤●いわゆる資本主義的な社会の中で、桜建会はお金のやりとりのない関係ですよ。お金の価値とは別な次元で活動できるのが同窓会なんだと思います。通常、斎藤先生の意見を聞きたいと思ったら、お金が絡むでしょう。

斎藤●絡まないよ。(笑)

佐藤●要するに、どこも知らない人が突然来ても対応できないでしょう。でも卒業生だったら、もっと気軽にやり取りが可能になります。日常と別のレイヤーの場をつくることができる。若い人だけが一方的に使うのではなく、斎藤先生や岩井さんなどのような年配者も使える、ギブ&テイクの関係。その関係が学生にもわかると、この桜建会というネットワークに入ることを理解してもらえんじゃないかと。毎年



SATOH Shinya 司会／広報委員会委員長
1968年東京都生まれ。92年理工学部建築学科卒業。94年同大学院博士前期課程修了。94～96年I.N.A.新建築研究所。96年より同大理工学部建築学科助手となり、2011年同大准教授。工学博士。専門は、建築計画。主な作品に「3331 Arts Chiyoda」などがある。

300人も卒業生がいるんで、そういう意識の人が、毎年30人でも十分かと思えます。むしろ、その人たちが長期間関係を維持できることの方が大事じゃないですか。

岩井●そう、そうね。

佐藤●だからこそ、その行為は主体的であるべきだと思います。本人がやりたい、やるべきと思っていることをやる。学生に対しては、だれがなにをしているのか、間接的にでも伝わるようにする。教員については、個人的にはもう少し興味をもってくれるといいと思いますが、そこもまた主体性の問題ですよ。

斎藤●教員も1割か2割、一所懸命やってくれる人がいるといい。

佐藤●僕もだれかに文句を言うより、自分でやればいいと思ってやっている。**小野**●強制するのは違うなという気持ち、わかりますね。

岩井●強制じゃ続かないですよ。僕自身、卒業してから20年間ぐらひはまったく桜建会には興味がなかった。基本的に自分の仕事の中で、先生との関係ができるようになってから興味がでてきた。いちばん密に関わりをもったのが、丸の内の開発をやっている時です。千代田区ですからね。自然にそういうかたちで付き合うと長持ちしますね。

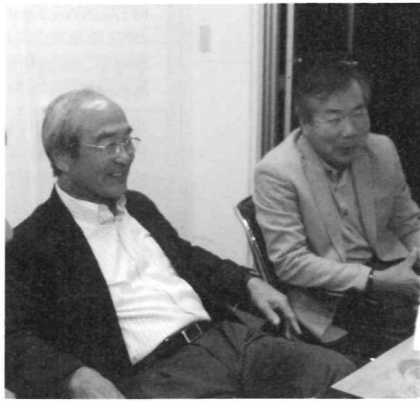
プラットフォームの構築

斎藤●北川君は桜建会に対しては、もっと実質的で、即効性を求めているよね。

北川●そうですね。でも、すぐになにかできるわけでもないですよ。以前、斎藤先生に構造の相談をしたりしたことが、とても役立っています。今やっているプロジェクトでも、桜建会を通して斎藤先生に相談していると言うと、「なるほど、そういう関係もあるのね」と納得してもらえます。ものができれば、わかりやすいから、少しずつ広がっていく。

小野●東海林さん、関谷さんの具体的なやりたいことってなんですか。

東海林●斎藤先生と岩井さんのお話を伺っていて、桜建会が学生、教員、さらにOBに対して、実際のフィールドを提供できるというのを改めて思いました。具体的には桜建会のネットワークを活用し、個人住宅や日大の関係施設、自治体の公共建築など、多様なかたちのコンペ企画が実現できるとおもしろ



いかなと思います。

佐藤●コンペ？

東海林●実施コンペです。住宅でいえば、日大の他学部も含めた父兄・卒業生などへの建築相談により建て替え・改修需要を掘り起こし、可能なものは実施コンペにつなげる。また昨今の公共建築のプロポーザル・コンペは、実績重視で若手が参加できません。それは自治体側が安心感を買いたい気持ちがあるからです。桜建会の構造、設備、施工他のさまざまな専門家が、発注者側あるいは入賞した若手への技術的支援を行うことで、若手が参加可能な開かれたコンペが実現できるのではないかと。卒業生には首長もいるので自治体にも働きかけやすい。日大の先生が審査委員になってもいい。コンペの中立性の観点から別組織を立ち上げるなど、工夫も必要かもしれませんが。

佐藤●それを本当に成立させるとすると、大学の施設あたりなら、あり得るかもしれない。

岩井●そういう仕掛けをつくって、日大の先生が前にでてやるのはいいと思いますね。もうひとつは、高齢化社会って言ったでしょう。この人たちを使わない手はない。なぜかという、彼らはリタイアしてヒマなはずなんです。退職を機に桜建会を辞めちゃったら大きな損失。その人たちのもっているネットワークを桜建会で利用するのは、活性化としてはいいんじゃないか。青年部は、若手中心の組織に変えていくと同時に、高齢者の活性化もできると非常にいいと思います。そういうことも、考えてみたいですね。

関谷●キャリアを積んできた先輩方のスキルを使わない手はないと思います。うまくそれを後輩たちにつなげる仕組みを、桜建会だったらつくれそうですね。会員としてのメリットがかたち

にならないと続かないですよ。

岩井●ある人材会社から説明を受けたことがあります。桜建会は建築のいろいろな分野の人がいますから、退職者の経験を活かして、現場監理をやる人がいますかと。桜建会で斡旋するわけにいかないけど、社会的な要請からすれば、需要としてそれはある。豊富な経験をもった人たちを、ボランティア的なかたちで使うのは、会社にとって相当なメリットです。今の建設業界は人手不足ですから、熟練の人が現場で指図するだけで、非常に助かります。桜建会だって、ただ会費を払うんじゃないで、多少でも社会とつながってあげたいですね。

関谷●設計の仕事をしていて思うのは、建築をつくることは、携わる方々の個人個人の質の積み上げです。長期的な評価として「日大は違うよね」と言われるためには、一人ひとりの評価や質を高めることであり、経験を通じたスキルアップがベースになる。そういう時に先輩方のアドバイスはすごい力になるし、大事なことなんです。学生と先輩のコミュニケーションというのは、一人ひとりの個人にとっても貴重な教育機会だと、僕は思います。

小野●そのためのプラットフォームをつくらなくてはいけません。個人的に斎藤先生や岩井さんに相談することもできるけど、短時間で効率的にやるにはプラットフォームのようなシステムがなくてはならない。

関谷●時間的な問題だけでなく、使い方が「見える化」されないといけない。そういう意味でもプラットフォームが大事です。コミュニケーションがとれる場を定期的に開いたりして、つながる

機会を提供する。

北川●以前青年部のメンバーがいろいろ話し合っ、1回プラットフォームをつくらうという話になりました。その時の話では、プラットフォームをつくる手段としてウェブをつくらうと。新規で入る人は、自分でなにができるかを登録して会員となる。いろいろと機能していくのは後になるけど、そういうデータベースを構築して、活動を展開していくという議論をして、話がまとまりつつあります。今後の動きとしては、これを具体化していくことですね。

佐藤●プラットフォームはチャレンジとしておもしろいと思うけど、桜建会は学生から年長者まで、60歳くらいの幅のある人たちを、ひとつのまとまりとして考えようという話なんです。まさに最初に岩井さんが話したように、多様性のある中で、どう考えたらいいか。入学したばかりの18歳の人と、80代の方とかがいるわけですよ。60歳以上の差がある人が、日大という枠の中で、どういう可能性があるのかなと。ウェブもひとつの可能性ではあるけど、プラットフォーム自体も、やはり多様でなければならぬ。多様な人たちがアクセスできるプラットフォームを、どうつくっていくか。ウェブだけじゃなくて、多様な方法も合わせて考えるのも有用じゃないかと思えます。

岩井●私も具体化していかないと、ダメだと思いますね。

小野●プラットフォームは、いろいろな場があって、その上で横につながるとい感じですか。

岩井●斎藤先生がやっているNU建築フォーラムもそうですね。

小野●ひとり、ひとつずつつくったら。

東海林さんなら行政ホームとか。(笑)

岩井●東海林さんから情報をだすと、けっこう集まるかもね。

東海林●公共空間ホームはどうでしょうか。公共建築は設計入札で安易に決めている場合が未だに多い。小規模案件でもコンペでアイデアを募って、開かれたプロセスを踏めるといい。

岩井●本来、そうあるべきですね。

東海林●公・民・学連携の視点で、公共空間をもっと豊かにする方法を考え、実践できたら。学内に閉じず、学生が社会と関わる接点となるといい。行政も絡めて、空き家や空地の活用を検討し提案するなど、産官学の垣根を越えて具体的にみんなで考え、協力できる場ができればいいと思います。

おまけ◎青年部を青春部に!?

岩井●青年部という名前はね、自民党の組織みたいなイメージでね。(笑)どうしてこの名前になったの？

北川●これも議論になったんですけど。**佐藤**●けっこう、ダメだしがでたんだよ。

北川●でも最終的に、亀井靖子先生が「古風でいいんじゃない」って。(爆笑)「古風だけど、やっていることが楽しければいいんじゃない」と、サラッとと言われて。

佐藤●亀井先生でしたか。

東海林●私も商工会議所のようなイメージをもちます。それもいいですが、内心は改められるといいなと思えます。

小野●思っているのでしたら、早く言ってくださいよ。(笑)

斎藤●「青年部」という名前より「青春部」の方がよくないですか。(笑)年齢がどう、ということではなくて、質的な問題として多様な発想が自然にできてくるような場にしていけないと。青年部は年齢制限があるの？僕も入りたいな。

小野●いや、先生も大丈夫ですよ。ただ、先生であっても代表の下につくことになりますよ。(笑)

北川●ニュース的には、斎藤先生が青年部に入部したというのはおもしろいんですよね。(大笑)

佐藤●最終的には「青年部」というような名前がなくなるような状態にもっていければいいですね。とはいえ、まずは青年部という名のプラットフォームをつくることで、活動スタートです。

本年10月4日、「セカイ」の事務所に集まって語り合った座談会。手前左から岩井会長、斎藤先生、佐藤先生。奥左から、小野さん、北川さん、東海林さん、関谷さん



追悼

黒沢隆先生

理工学部元非常勤講師 享年73歳



2012年7月撮影

去る3月15日、黒沢隆先生は還らぬ人となった。

1941年8月20日、東京に生まれた先生は、65年3月に日本大学理工学部経営工学科を卒業。その後、東京大学教養学部生田勉研究室研究生を経て71年3月、日本大学大学院博士課程を修了している。先生は、建築家、文筆家、教育者として、学生時代から八面六臂の活躍をされてきた。

建築家としては73年に黒沢隆研究室を開設。「ホシカワキュービクルズ(77)」などの〈個室群住居〉や、「崖の家(84)」などの〈普通の家〉、そして「コワン・キ・ソヌヌ(85)」といった集合住宅への取り組みを中心に設計活

動を展開された。文筆家としては、建築論や建築批評が中心となり、『住宅の逆説(生活編76・匠編79)』『陰りゆく近代建築(79)』『個室群住居論(87)』『近代一時代のなかの住居(90)』『集合住宅原論の試み(98)』といった著作に結実されている。しかしながら先生の関心は広範で、ライフスタイルやダンディズムなどについても論じてこられた。その成果は『建築家の休日(87・続89)』にまとめられている。

教員としては、母校の日本大学では理工学部のみならず生産工学部や芸術学部でも、また、芝浦工業大学や山脇学園短期大学、東海大学、東京藝術大学など数多の教育機関でも教鞭を執ら

本学で長年にわたり教鞭を執り、多くの学生を育て、学会、業界に大きな足跡を残した黒沢隆先生、日高單也先生、神谷宏治先生が逝去されました。親しく警咳に接した縁の深い先生方に、故人を偲ぶことばを寄せていただきました。

れ、それもあって学閥を超えて黒沢スクールたる門下生を輩出していった。私と先生との出会いは83年、大学3年生の時だった。講義を通じて、歴史的・世界的にものを考えるおもしろさと、理屈(ことば)とモノ(建築)との関係を統合的に読み解く術に触れられ、ワクワクする思いだった。あたりまえと思われる事柄があたりまえではないこと。そしてどうすればきちっとした答え=あたりまえを見つけられるのか、黒沢先生は常に明快でした。

私のオランダ留学時には、折を見て陣中見舞いして下さった。案内するなかで、街角に建つ一見、変哲もない建物にもさりげないデザイン心が潜ん

でいることに気づかれ、かの国の民意の高さを喝破された。その後、パリへとお送りする道中、昼食のため名も知らぬ町のレストランに入った。自分でメニューを選べるようにと小型のフランス料理辞典を持参されていて、しばしそのページをめくっていた先生は、やがてひと言。「チキショウ、手書きのメニューの字が読めない」とのこと、大爆笑となった。

先生から学んだことは、建築という枠には収まらない。門下生への、社会への、先生からのなによりものメッセージは、自立して生きるということ。そして、そのうえで社会との縁を自覚的に育む、ということだったと思う。

つまり、今日を生きるためにあたりまえの姿とはなにかを、建築というモノ、文章や講義でのことばを通じて、先生は語り続けてきたのである。

とある場所で「建築の話」を借りて社会の話をしただけで、最終的には「建築の話」ではなく「社会の話」をしたかったと述べられている。だとすると、黒沢先生の本質は、愛読していたルイス・マンフォードに比肩する偉大なる文明評論家だったということに、今さらながら気づかされた。先生とともに過ごしたワクワクする時間に、感謝を込めて。

矢代眞己(短期大学部建築・生活デザイン学科教授)

日高單也先生

生産工学部元教授 享年73歳



日高單也先生は本年5月13日にご逝去されました。享年73歳でした。

先生は日本大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了後、2011年に退職されるまで、42年間にわたり大学の教育、研究ならびに本学の発展に尽くされ、その中でも新しい学科の開設に尽力され、09年に新学科として開設された創生デザイン学科の初代学科主任をお務めになられました。

その後、本年2月まではふだん通り

に演習授業で学生たちに指導をしていたのを思い出します。亡くなられる前日には先生とお話しをしたのが昨日のように感じられます。

先生の研究テーマである造形デザインにおいては、建築設計作品と論文発表以外にも、先生と私の恩師でもある小野襄造形研究室にてデザイン理論の構築と各種デザイン開発を行い、1974年よりデザイン作品発表を始め79年からは新制作協会会員として2013年

まで発表(於 東京都美術館、国立新美術館、京都市美術館など)を続けておりました。

先生は多くの作品を残されさまざまな場所へ設置されておりますが、1991年には高知県立歴史民族資料館・アトリウム壁面彫刻「層崖」、99年には群馬県明和町町制施行モニュメントも手掛けられ、2000年に社団法人日本建築美術工芸協会特別賞を受賞し、04年には新制作協会委員長(会長)をお

務めになられました。そして、これらのデザイン作品を発表し続けると同時に社団法人日本建築美術工芸協会(aaca)常務理事(副会長)、財団法人大場代官屋敷保存会理事(東京都認可公益法人)、財団法人モーレイ育英会理事長(東京都認可公益法人)などの役職を歴任し日本の芸術文化の発展、そして若者の育成に力を注がれておりました。

指導では厳しい先生であり、多く

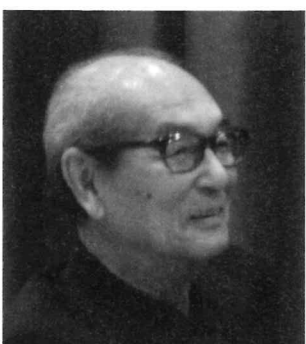
の学生が怒られて卒業していきましたが、学生を見捨てることなく指導をしてくださる優しい先生でもあり、学生たちとお酒を飲みに行くのも好きでした。

最後に、先生の生前の業績とご指導に深く敬意と感謝を表すとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

田中遵(生産工学部創生デザイン学科准教授)

神谷宏治先生

日本大学名誉教授 享年86歳



神谷宏治先生は本年10月2日、胃がんにより逝去されました。享年86歳でした。

先生は1972年4月教授として迎えられ、98年に定年退職されるまで、本学の教育、研究ならびに本学の運営と発展にご尽力されました。退職後、日本大学名誉教授の称号を授与されました。

先生は、東京大学工学部建築学科を卒業後、57年同大学院(旧制)を修了し、引き続き丹下健三研究室にて研究・設計に従事されました。そして、61年都市・建築設計研究所に入所・代表取締役役に就任されました。71年同研究所を退所するまでの14年間、建築家丹下健三の右腕として、数々の歴史的な意味

をもつ建築作品を設計されました。中でも65年「オリンピック代々木競技場および駒沢公園の企画・設計ならびに監理」で日本建築学会特別賞、65年「国立屋内総合競技場」で第6回BCS賞、70年「日本万国博覧会基幹施設のレイアウト」で日本建築学会万国博特別賞、70年「万国博大屋根の巨大架構」で科学技術庁長官賞を受賞されました。

71年に神谷宏治計画設計事務所(後に神谷・荘司計画設計事務所)を開設し、77年「SSビル」で神奈川県建築コンクール特別賞・優秀賞、78年「川崎市民プラザ」で神奈川県建築コンクール最優秀賞、83年「川崎市葬祭場」で神奈川県建築コンクール優秀賞、93年「ヨ

ネッティ王禅寺」でIAKS(International Association for Sports and Leisure Facilities)AWARD金賞を受賞されました。

同時に、日本建築家協会理事、国際委員、日本建築学会評議員、日本建築学会学会賞(作品)審査委員、東京都マイタウン構想懇談会委員、建設省、各自治体、そして日本建築士会連合会などが主催する設計競技の審査委員長および審査委員を歴任されるとともに、NPO法人コーポラティブハウス全国推進協議会の副会長としてコーポラティブハウジングの普及・発展に務めてこられました。また、数々の功績により2010年、日本建築家協会名誉会員に推挙されました。

加えて、学内では建築工学科主任、建築工学専攻主任、生産工学部100周年記念講堂建設委員会・事業委員会委員長、学術交流委員会委員長、企画担当、学務担当などを歴任されました。

このように多大なご業績をもたれた先生を失いましたことは、本学はもとより建築・都市設計、コーポラティブハウジングの分野において誠に痛恨の極みであります。

先見の明あるいくつかのお話しとともに、研究室ではコンペの作業中のことが思い出されます。先生の眼鏡にかかった作品内容にはなにも語らず、ただ「コンペの泣かせどころは七つだよ」と静かに言われたことや、「勝っておご

らず、負けてひるまず」と言われたことが忘れられません。昨年の丹下健三生誕100年を記念した瀬戸内国際芸術祭トリエンナーレに出展する「香川県庁舎」の模型づくりの指導を仰ぎ研究室に数回来ていただきました。図面からはどうしても読み取れないいくつかの部分について懇切丁寧に解説していただきました。

先生のご業績とご指導、そしてご薫陶に深く敬意と感謝を表すとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

川岸梅和(大学院生産工学研究科建築工学専攻・生産工学部創生デザイン学科教授/校門建築会副会長)

事務局だより

第34回建築講座と平成25年度の特別維持会懇親会を開催

第35回建築講座が、本年11月19日(水)に行われた。今回は、本学OBで現在生産工学部と短期大学部非常勤講師の内村綾乃氏を迎えて、2014年日本建築学会賞(作品)で、共同受賞した作品「SHARE yaraicho」について紹介しつつ、これからの都市住宅のあり方について

講演を行った。

また、この日は理工学部駿河台校舎1号館2階のカフェテリアで特別維持会員懇親会を開催した。今年度も昨年と同じように「桜建ふれあい2014」と題して、個人会員から寄せられた作品のパネルを展示し、出席者72名の盛会となった。

愛知県支部だより



桜建会愛知県支部総会が本年7月12日(土)、中日パレスで開催された。日本校友会愛知県支部長筒井隆彌氏(校友会副会長・法43卒)を来賓に迎え、東京から土屋重文氏(レーモンド設計事務所取締役・理工45卒)を講師に招き、『アントニン・レーモンドの人となりと作品について』と題して講演を行った。当日は猛暑にも関わらず20名余が参加し、楽しい一夜を過ごした。翌日

から始まった大相撲名古屋場所も日大出身の遠藤人気で幕を明け、連日満員御礼で盛り上がった。

今回470名に通知し、返答160・無返答310。新たにメールアドレスのお知らせもあり、今後は名簿の整理、桜建会の情報などを発信し、より身近に感じられるよう努力したい。(川辺清次/支部長、理工・S45年卒)

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先 (平成26年6月5日~11月5日) 9名

伊藤 潤	理工海 -H14	(株)フジタ	浅井 透	生産工 -57	東急建設(株)
野田 りさ	生産工 -H20	日本大学生産工学部	楠川 邦輔	理工建 -41	楠川構造研空室一級建築士事務所
本間 俊雄	理海院 -61	国立大学法人鹿児島大学	杉本 弘文	生産工 -H16	都城工業高等専門学校
苅部 弘之	生産工 -52	野原産業(株)	二宮 康秀	理工建 -63	二宮建設(株)
石井 雅人	生産工 -H7	大成建設(株)			

桜建会報 NO.101 2014-December
 発行人 岩井光男
 編集 桜門建築会広報委員会
 〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
 日本大学理工学部内

広報委員会
 委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)
 副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)
 大川三雄(理工学部建築学科)
 委員 山本和清(理工学部海洋建築工学科)
 亀井靖子(生産工学部建築工学科)
 プンタラ・S・ガン(工学部建築学科)
 矢代眞己(短期大学部建築・生活デザイン学科)
 大西正紀(mosaki)
 西山麻夕美(フリー編集者)
 北川健太(セカイ/青年部代表)

桜建会事務局
 住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
 理工学部5号館7階574A号室
 TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
 E-mail kain@okenkai.jp
 ホームページ <http://www.okenkai.jp/>
 専任/星野麻衣子
 非常勤/櫻井佐和、大木明子
 業務時間/AM10:00~PM5:00(月~金)

学部ニュース



トピックス

◎速水清孝准教授は、『建築家と建築士—法と住宅をめぐる百年』(東京大学出版会、2011年)と題する著書で、5月30日、2014年度の日本建築学会著作賞を受賞した。なお、同書は、昨年度の建築史学会賞も受賞している。

◎10月17日に行われた第18回JIA東北建築学生賞で、築山茉莉子君(浦部研4年)が優秀賞を、高梨真弘君(浦部研3年)が奨励賞(東北専門新聞連盟賞)を受賞した。



2014年度の日本建築学会著作賞を受賞した速水清孝教授の授賞式



海洋建築工学科トピックス

◎本年9月10日、丸善出版から日本建築学会編の『東日本大震災合同調査報告 建築編3、鉄骨造建築物、シェル・空間構造』(B5版 DVD付)が刊行された。新宮清志名誉教授は、シェル・空間構造部門の第1章などを執筆した。なお、建築編は全11編で構成する予定で、本書は刊行第1号である。

◎川西利昌名誉教授が『日除け理論』をデザインエッグ社より刊行した。本書は2012年出版した『紫外線・熱中症を防ぐ日除け』(技報堂出版)の内、「太陽の動き」、「太陽直達を防ぐ日除け」、「紫外線を防ぐ日除け」の章について、

図式解法を用いて詳しく解説している。紫外線は見えないため、従来、日除けの紫外線防衛性能評価ができなかったが、本書は独自のチャートを考案して性能評価を可能にしている。日除けを計画している建築士、建築系大学生、公園管理者、イベント企画者、スポーツ関係者、教育関係者、行政機関に最適な内容である。

表紙には斎藤公男名誉教授の設計で、船橋校舎にあるレストドームが使われている。

◎本年10月19日、設計競技「よこはまの海を活かしたまちづくりコンペ」

(主催/みなと総合研究財団)の公開審査会が、メルパルク横浜にて開催された。本学科からは、3作品が1次審査を通過して、最終の公開審査会にエントリーされた。この審査の結果、本学科の佐藤研究室と山本研究室所属の4年生チーム(井出健君・宇山浩和君・出山亮君・樋浦直紀君・戸田寛康君)の作品、「東神奈川臨海図書館 ~本でつながるうみのまち~」が、3等に相当する京浜港湾事務所賞(デザイン賞)を受賞した。



『日除け理論』の表紙。日除けは、日焼けや熱中症を防ぐ効果的なツールとして詳しく説明する。発行/デザインエッグ社 B5版 138ページ、定価2700円

審査当日に行われた表彰式。戸田君、出山君、樋浦君(右から)が賞状を受け取った



◎吉沢彬成君、中田有紀さん(今村研 M2)による作品「小さな住処と大きな広がりの家」が「第1回 POLUS ポラス学生・建築デザインコンペティション」(応募総数 458 件)で上位 5 選に入賞した。

◎渡辺裕貴君(今村研 M2)、近藤正和君(佐藤光彦研 M2)、西明慶悟君(山崎研 M2)、平野雄一郎君(佐藤慎也研 M2)の 4 名の作品が、「キルコス国際建築設計コンペティション 2013」(応募総数 339 件)で、椎名英三賞佳作に入選した。

◎長尾芽生さん(13 年度佐藤慎也研修了)の修士論文「地域における文化活動拠点の評価に関する研究 墨東エリアにおけるアートプロジェクトを対象として」が、「トウキョウ建築コレクション 2014 全国修士論文展」(主催/トウキョウ建築コレクション 2014 実行委員会)で、一次審査通過者 10 編に選ばれ、公開討論会に参加した。

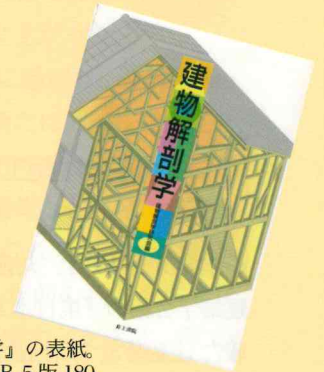
◎空間構造デザイン研究室(岡田・

宮里研)は、「TRANS ARTS TOKYO 2014 神田リビング・パーク」(会場/旧東京電機大学跡地)において、当研究室が開発・製作した「バイオストラクチャー・虹のシザーズ」を設置・展示した。バイオストラクチャーはハサミの原理を用いて、収納・運搬・展開が容易な構造となっており、設営は当研究室の 4 年生と大学院生の手により 5 時間ほどで行われた。

◎佐藤慎也研究室は、「LIVING AS FORM (THE NOMADIC VERSION) ソーシャル・エンゲイジド・アートという潮流」(会場/3331 Arts Chiyoda)において、展示デザインを担当した。この展示会は、都市計画や福祉、教育、さまざまなコミュニティ活動や政治運動を美術や演劇といった創造的、象徴的な表現と結び付け、可視化したり、価値を明らかにすることによって社会に現実的な変化をもたらす試みを紹介するもの。

◎本年 6 月、井上書院より松井勇教授、浅野平八教授を中心とする建物解剖学研究会が執筆した『建物解剖学』が刊行された。本書は、建築を学ぶ初心者にもわかりやすく、建築の部位や部分を木造軸組み建築を基礎に説明した一冊である。

◎本年 10 月、秋田市で行われた日本木材加工技術協会の第 32 回年次大会で、大木文明君(師橋研 M2)のレポート「木板-コンクリート複合床の性能に関して」が、展示発表部門の「大会特別賞」を受賞した。



書籍『建物解剖学』の表紙。発行/井上書院 B5版 180 ページ 定価 2700 円



上左/「小さな住処と大きな広がりの家」プレゼンテーションの一部。上右/椎名英三賞佳作に入選した「微気候のある家」のプレゼンテーションの一部。下左/「2014 神田リビング・パーク」に展示した「バイオストラクチャー・虹のシザーズ」。下右/「LIVING AS FORM ソーシャル・エンゲイジド・アートという潮流」の展示会場